

離島・へき地実習における学生と受入校の意識調査 およびオンラインコンテンツ導入の成果と課題

鎌 田 英一郎

Analysis of an Awareness Survey of Students and Schools and The Effects and Issues of Introducing Online Contents in Remote Islands and Areas Training

Eiichiro KAMADA

1. 研究の目的

離島・へき地実習は、学校行事や地域の行事等といった学校教育全体に関わる体験的な教育実践活動を通じて離島やへき地の学校教育の現状や地域に果たす「学校」の役割を理解することを目的とした実習であり、長崎大学教育学部が独自に設定する科目「学校教育実地体験学習」に含まれる実習の一つである。また、離島・へき地実習では少人数や複式授業、学校経営、地域交流の現状を把握し、学校・子ども・地域に対する理解を深めることにより、離島やへき地における教育的ニーズや課題に対して柔軟に対応できる人材を養成することを目指している。対象学年は学部4年生で、参加人数は最大40名としている(2020年度実施分)。対象地域は五島市、新上五島町、南島原市、平戸市の4地区とし、学生は配属地域に5日～10日程度滞在し、児童・生徒をはじめ、教員、学校、地域の方とともに実習を行う。

長崎県は全国で最も離島が多く、離島で勤務する教員には離島における教育的ニーズや課題の把握、またその解決に係る知見や実践力が求められる。とくに児童・生徒数の少ない学校では複式学級が編成されており、複式授業の進め方に関する知見が必要となる。五島市および新上五島町における2020年度の複式学級を有する小学校数は、五島市で全14校中7校、新上五島町で全11校中7校と半数以上が該当する¹⁾。複式授業は1つの学級で異学年の授業を同時並行に行うため、直接・間接指導に伴う学習の停滞や、間接指導中の思考の中断、練り合いができず思考が深められないといった教科等の指導上の課題が挙げられている²⁾。また、児童・生徒数が少ないため考え方や視野が限られたものになる、人間関係の固定化や多様な意見に触れる機会が少ない、切磋琢磨する教育活動が少ないといった課題も挙げられている³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾。加えて社会教育施設である図書館や美術館、その他の公共施設が近くになく、文化的・人的資源に恵まれないことも課題の一つである。このような現状において教員も人的交流と物・情報のやりとりによりかなりの制約があることを実感している⁷⁾。

長崎県ではこれら課題を解決するため複式支援等非常勤講師の配置やICTを活用した離島教育の充実を図っている⁸⁾。ICTの活用では遠隔授業システムの活用により小規模校で不足しがちな多様な考えに触れながら学びの機会を確保するとし、長崎市中心部と離島

の学校をテレビ会議システムでつなぐ遠隔協働学習を実施している⁵⁾⁷⁾。離島・へき地に勤務する教員はテレビ会議システムについて肯定的な意見を持っており、離れた学校との共同学習においてより活用したいと考えている⁹⁾。また、人的・物的資源に関する課題においては、離島の中学校へのものづくり教育支援出前授業の事例があり、出前授業により生徒の創造力や学習意欲、進路意識が高まることも報告されている¹⁰⁾。離島地域での子どもの修学機会の確保に向けた取り組みが著しく上昇している¹¹⁾ことから、離島で勤務する教員にはICTの活用をはじめ、複式授業の進め方、都市部の学校や外部機関と連携した協働学習に関する実践力が求められると考えられる。また、長崎県の将来像を見据えた施策の方向性においては、地域別計画において五島や上五島では「地域が支え合い愛着と誇りをもって住み続けられるしまづくり」や「五島列島の今を支える人、未来を担う人を育むしまづくり」が掲げられており¹²⁾、離島で勤務する教員には離島の魅力に気付かせ、地域コミュニティを支えたとともに、地域の将来を担う人材育成を行うことも求められると考えられる。このような中、長崎県では2020年度の公立学校教員採用選考試験(小学校教諭)より離島教育特別枠を設置し、離島における教育の一層の充実のため、地域に根差し、離島教育に対する熱意と見識を持った人材の採用を進めている¹³⁾。長崎大学教育学部においても学校推薦型選抜における離島教育推薦枠の設置や離島教育プログラムの開設により離島教育の資質を備えた教員の養成を目指しており、離島・へき地実習も重要な位置づけであると考えられる。

離島実習は離島への赴任に対する不安を軽減させるとともに、離島・へき地小規模校に対するマイナスイメージをプラスに転換させるなど、実習生の意識を大きく変容させている¹⁴⁾。また離島実習では、継続的な教員経験によってのみ得られる視点もあるものの、実習生は離島勤務教員がもつ離島教育の良さや課題の視点を得やすいことが明らかとなっている¹⁵⁾。医学部生においても、離島実習が医師へのモチベーションの向上や実感を伴った学びにつながる¹⁶⁾、地域独自の文化、価値観、生活様式に触れ、人間理解や社会システムを理解する能力を養う有意義な場となることが挙げられている¹⁷⁾。このように離島実習は離島教育における意欲や資質を高めることにつながり、離島・へき地実習を実地で行う意義は大きい。

しかし、2020年度実施の離島・へき地実習は新型コロナウイルス(COVID-19)の感染の拡大により、離島での実習が中止となった。長崎大学教育学部では離島・へき地実習中止に伴い、代替として離島・へき地実習オンラインコンテンツを導入し(表1)、学生はこのオンラインコンテンツに取り組むこととなった。

本研究では、離島・へき地実習に臨むにあたり学生がどのような意識を持っているか、また受入校が本実習に対してどのような意識を持っているか調査を行うとともに、代替実習となったオンラインコンテンツの成果と課題を明らかにすることを目的とした。また、離島・へき地実習における遠隔授業を想定したオンライン交流について離島地区の受入校の実態を調査し、オンライン交流の可能性について検討した。

2. 調査方法

本研究では、離島・へき地実習における学生および受入校の意識調査、遠隔授業を想定したオンライン交流実現に向けた受入校の実態調査をアンケートにより調査するととも

表1 オンラインコンテンツの概要

離島・へき地実習オンラインコンテンツの課題内容
(1) 離島・へき地の現状と課題 ①離島へき地の魅力を調査しまとめる ②離島・へき地の課題について調査しまとめる ③離島・へき地の教育について調査しまとめる
(2) 離島・へき地における教育について ①課題図書 ②離島・へき地と教育（複式授業のビデオ視聴） ③学校との交流（実習予定校への手紙やビデオメッセージ作成）
(3) 教材づくり 離島・へき地における今後の教育方法を考慮した教材の開発 ・(1)で調べた、離島へき地の課題を解決できる教材 ・(2)で調べた、複式授業（または少人数授業等）に対応した教材 ・オンラインを活用した教材

に、オンラインコンテンツ導入の成果と課題について事後アンケートにより調査した。アンケートは Google Form および質問紙を利用して実施した。調査対象は2020年度実施の離島・へき地実習に参加した長崎大学教育学部4年生40名と、同実習の受入校であるA市の公立学校6校（小学校3校、中学校3校）とした。

離島・へき地実習における学生への意識調査は2020年4月3日に実施し40名から回答を得た（回収率100%）。調査項目は「離島・へき地実習の希望理由や学びたいこと」とした。受入校へのオンライン交流実現に向けた実態調査および離島・へき地実習に対する意識調査は2020年9月15日に実施し6校から回答を得た（回収率100%）。調査項目は離島・へき地実習のオンライン対応について8項目と離島・へき地実習についての意識調査6項目の合計14項目とした。オンラインコンテンツ実施に伴う学生への事後調査は2021年2月19日に実施し27名から回答を得た（回収率67.5%）。調査項目は離島・へき地実習へ参加したと思った時期についての1項目、オンラインコンテンツ全体を通じての質問を6項目、(1)の課題について5項目、(2)の課題について6項目、(3)の課題について4項目を設定した。また、自由記述として良かった点、改善してほしい点、感想の3項目を設けた。なお、2020年度の離島・へき地実習ではオンラインコンテンツにおいて受入校1校とオンライン交流を実施した。対象はA市立B小学校5・6年生（複式学級）と配属学生3名である。オンライン交流は2021年2月4日に実施し、実施時間は45分間（1単位時間）とした。

3. 結果

3-1 学生へのアンケート（事前アンケート）から

表2に離島・へき地実習の希望理由や学びたいと思ったことの回答を示す。調査では番号1～10の中から2つを選択することとした。回答は「離島・へき地の学校の現状や課題について知りたかった」が16名と最も多く、次いで「将来教員になった際に必要だと思ったから」が14名、「地域と学校とのつながり」が13名、「子どもたちの様子」が12名であった。回答の組み合わせでは、「離島・へき地の学校の現状や課題について知りたかった」

表2 離島・へき地実習の希望理由や学びたいと思ったこと (N=40)

番号	項 目	回答数
1	離島・へき地の学校の現状や課題について知りたかった	16
2	将来教員になった際に必要だと思ったから	14
3	地域と学校とのつながり	13
4	子どもたちの様子	12
5	離島・へき地での教員の在り方	11
6	少人数や複式での授業方法	9
7	自然	3
8	離島に行ったことがないから	2
9	まだ考えていない	0
10	その他	0

と「将来教員になった際に必要だと思ったから」や「子どもたちの様子」が多かった。

また、離島・へき地実習の目標に関する自由記述では、離島の現状を知りたいと答えた学生が最も多く、次いで子どもたちとの関わりや地域とのつながりであった。また、将来教員になったときのことにつなげて考えている記述もみられた。

3-2 受入校へのアンケート調査から

表3に離島実習におけるオンライン対応およびオンライン交流についての回答を示す。離島・へき地実習におけるオンライン対応について可能と回答した学校は4校、難しいと回答した学校は2校であった。教員と学生との交流については可能が5校、難しいが1校、学生が教員にインタビューすることについて可能が5校、難しいが1校であった。

表4にオンライン対応が難しい要因についての回答を示す。オンライン対応が難しいと答えた2校は、オンライン交流の時間が取れないことや児童・生徒、また大学生への効果が期待できないことを挙げていた。

オンライン対応が可能と答えた4校に対しては、実施時間や実施回数、実施期間、実施学年を調査した。その結果、実施時間は「1時間程度（または1単位時間45分程度）」が2校、「半日（午前、午後）」と「30分程度」が1校ずつであった。回数では「2～3回」が3校、「1回」が1校であった。期間では「月に1回程度」が2校、「1日のみ」と「期間を決めて1～2回程度」が1校ずつであった。対象や学年については「どの学年でも対応可」が3校、「担当する教員によって変わるため不明」が1校であった。

表5にオンライン交流で実施可能な内容についての回答を示す。回答は「学生の将来の夢や児童・生徒の将来の夢について交流」が4校と最も多く、次いで「学生との交流、質問等」の3校であった。また「お互いの自己紹介や学校紹介」、「児童・生徒の発表会」などの回答があった。一方、「大学生の発表会」、「学習支援」、「児童・生徒の悩み相談」、「ミニ講義（授業）」については回答がなかった。

図1に離島・へき地実習に期待することの回答を示す。回答は「離島・へき地における教育の現状を知ってもらいたい」と「離島・へき地の魅力を知ってもらいたい」が最も多く6校であった。次いで「子どもたちと触れ合ってもらいたい」の5校、「離島・へき地

表3 離島実習におけるオンライン対応および交流について (N=6)

項 目	可能	難しい
離島・へき地実習においてオンライン対応可能ですか	4	2
オンライン交流において、貴校の教員と学生との交流は可能ですか	5	1
オンライン交流において、貴校の教員に学生がインタビューすることは可能ですか	5	1

表4 オンライン対応が難しい要因 (N=2)

項 目	回答数
オンライン交流の時間がとれない	2
オンライン交流での児童・生徒への効果が期待できない	2
オンライン交流での大学生への効果が期待できない	2
児童・生徒への指導が難しい	1
ウェブ会議等に詳しい教員がいない	0
インターネットに接続できない (またはネットワークの回線速度が遅い)	0
機材がない	0

表5 オンライン交流で実施可能な内容について (N=4, 複数回答)

項 目	回答数
学生の将来の夢や児童・生徒の将来の夢について交流	4
学生との交流, 質問等	3
お互いの自己紹介や学校紹介	2
学生生活を大学生が紹介	2
離島・へき地の様子を児童・生徒が紹介	2
児童・生徒の発表会	2
大学生の発表会	0
学習支援	0
児童・生徒の悩み相談	0
ミニ講義 (授業)	0

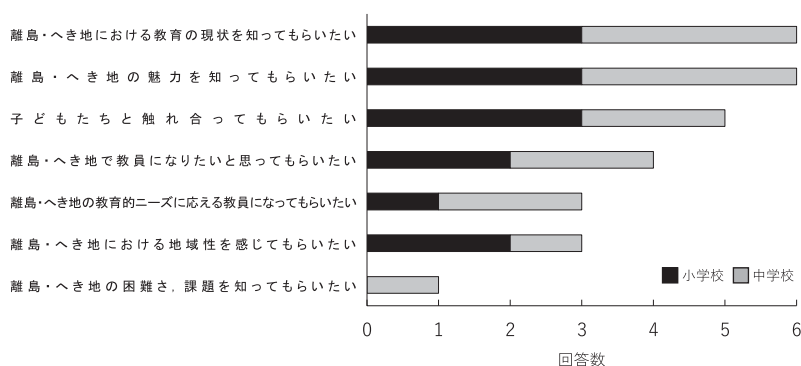


図1 離島・へき地実習に期待すること (N=6, 複数回答可)

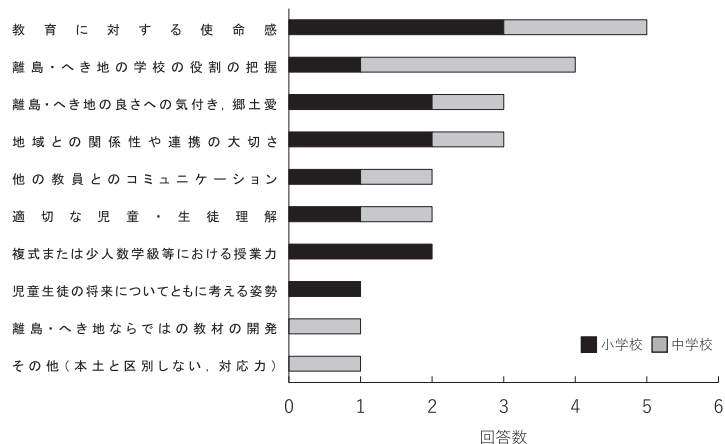


図2 離島・へき地実習を通して学生に身に付けてほしい力 (N=6, 複数回答可)

表6 これまでの離島・へき地実習について (N=6, 5件法)

項目	平均値	S. D
実習生の様子はいかがでしたか	1.3	0.52
離島実習の継続性について	1.8	0.41
児童・生徒の反応について	1.2	0.41
地域の方の反応について	1.5	0.55
教員の反応について	1.5	0.55

で教員になりたいと思ってもらいたい」の4校であった。一方、「離島・へき地の困難さ、課題を知ってもらいたい」は1校と少なかった。

図2に離島・へき地実習を通して学生に身に付けてほしい力の回答を示す。回答は「教育に対する使命感」が5校と最も多く、次いで「離島・へき地の学校の役割の把握」の4校、「離島・へき地の良さへの気付き、郷土愛」と「地域との関係性や連携の大切さ」の3校であった。小学校では「複式または少人数授業等における授業力」や「児童生徒の将来についてともに考える姿勢」が挙げられ、中学校では「離島・へき地ならではの教材の発見」や、その他として「離島やへき地と本土を区別しないこと」と「対応力」が挙げられていた。

表6にこれまでの離島・へき地実習についての回答を示す。調査は5件法にて実施した。回答の平均値はいずれの項目も1.8以上と高かった。離島・へき地実習では実習生の様子や児童・生徒の反応について良いという回答が多く、地域の方や教員の反応についても良いという回答が多かった。離島実習の継続性についてもできれば続けたいとの回答が多かった。

3-3 学生へのアンケート調査 (オンラインコンテンツ事後アンケート) から

図3に離島・へき地実習に参加したいと思った時期の回答を示す。学生が離島・へき地実習に参加したいと思った時期は3年次が41%と最も多く、次いで1年次が26%、受験の

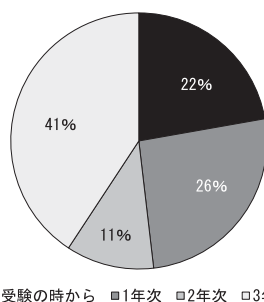


図3 離島・へき地実習に参加したいと思った時期 (N=27)

表7 オンラインコンテンツを通じて感じたこと (N=25, 4件法)

項目	そう 思わない	あまり 思わない	やや そう 思う	そう 思う	平均	S.D
離島・へき地について学びが深まった	3	5	13	4	2.7	0.89
離島・へき地について新たな発見があった	0	2	12	11	3.4	0.64
離島やへき地の教育に携わりたいという気持ちが強くなった	3	5	12	5	2.8	0.93
教職の魅力、教職への想いがさらに強くなった	4	3	11	7	2.8	1.03
コンテンツの課題は大変だった	4	6	13	2	2.5	0.87
できれば実習に行きたかった	0	0	0	25	4.0	0.00

時からが22%であった。

表7にオンラインコンテンツを通じて感じたことについての回答を示す。「離島・へき地について学びが深まった」についてはそう思う、ややそう思うと回答した学生が17名、あまりそう思わない、そう思わないと回答した学生が8名であった。「離島・へき地について新たな発見があった」はそう思う、ややそう思うと回答した学生が23名、あまりそう思わないと回答した学生が2名であった。また、「離島やへき地の教育に携わりたいという気持ちが強くなった」ではそう思う、ややそう思うと回答した学生が17名、あまりそう思わない、そう思わないと回答した学生が8名、「教職の魅力、教職への想いがさらに強くなった」ではそう思う、ややそう思うと回答した学生が18名、あまりそう思わない、そう思わないと回答した学生が7名であった。「コンテンツの課題は大変だった」ではそう思う、ややそう思うと回答した学生が15名、あまりそう思わない、そう思わないと回答した学生が10名であった。また、「できれば実習に行きたかった」ではすべての学生がそう思うと回答した。

表8に課題の量が適切であったかについての回答を示す。(1) および (2) の課題については多いまたはやや多いと回答した学生が56.0%と多かった。(3) については適量と答えた学生が52.0%と多かった。(1) ~ (3) において少ないまたはやや少ないと回答した学生は少なかった。

表9に(1) ~ (3) の課題における理解度調査の結果を示す。(1) の課題は離島・へき地の現状と課題についてまとめる課題であり、離島地区の魅力、課題、教育について調査し、まとめる項目である。それぞれの項目はいずれも平均が3.0以上であり、「できた」または「だいたいできた」と回答した学生が多かった。

表8 課題の量は適切だったかについての回答 (N=25, 5件法)

項 目	少ない	やや 少ない	適切	やや 多い	多い	平均	S. D
(1) の課題の量は適切でしたか。	0	1	10	12	2	3.6	0.71
(2) の課題の量は適切でしたか。	0	1	10	9	5	3.7	0.84
(3) の課題の量は適切でしたか。	0	2	13	6	4	3.5	0.87

表9 各課題における理解度調査 (N=25, 4件法)

項 目	できな かった	あまり できな かった	でき た	あまり だいたい でき た	平均	S. D
(1) 離島・へき地の魅力をウェブサイトや観光ガイドから理解できた	0	4	12	9	3.2	0.71
長崎県総合計画 (チャレンジ2020) の内容から離島・へき地の現状と課題について理解できた	0	4	16	5	3.0	0.61
へき地教育研究指定校の資料から離島・へき地教育の現状を理解できた	0	2	16	7	3.2	0.58
(2) 課題図書から離島・へき地における教育について理解できた	0	2	18	5	3.1	0.53
ビデオ資料から小規模、少人数学級における授業の進め方について理解できた	2	4	12	7	3.0	0.89
実習予定校への手紙、ビデオメッセージ、オンライン交流等から、離島・へき地の子どもたちとつながることの大切さに気付けた	1	5	7	12	3.2	0.91
これまでの学びをもとにキャッチフレーズを作ることができた	1	3	10	11	3.2	0.83
(3) 教材や指導計画を考えることができた	1	2	13	9	3.2	0.76
離島・へき地、複式や少人数に対応できた	2	3	15	5	2.9	0.81
オンラインに対応した教材ができた	1	6	13	5	2.9	0.78

(2) の課題は離島・へき地における教育についてまとめる課題である。それぞれの項目はいずれも平均が3.0以上であり、こちらも「できた」または「だいたいできた」と回答した学生が多かった。とくに「実習予定校への手紙、ビデオメッセージ、オンライン交流等から、離島・へき地の子どもたちとつながることの大切さに気付けた」「これまでの学びをもとにキャッチフレーズを作ることができた」では「できた」と回答した学生が多かった。一方、「ビデオ資料から小規模、少人数学級における授業の進め方について理解できた」「実習予定校への手紙、ビデオメッセージ、オンライン交流等から、離島・へき地の子どもたちとつながることの大切さに気付けた」については「できなかった」と回答した学生がおり、「あまりできなかつた」と合わせて否定的な回答も多くなっていた。

(3) の課題は離島・へき地で活用できる教材づくりの課題である。「教材や指導計画を考えることができた」では平均が3.2であった。一方、「離島・へき地、複式や少人数に対応できた」や「オンラインに対応した教材ができた」はいずれも2.9と低く、「できなかつた」や「あまりできなかつた」の回答がやや多かつた。

表10にオンラインコンテンツ (1) の調査における離島教育に対するイメージの変容の

表10 (1)の課題終了後における離島教育に対するイメージの変容

項 目	あった	なかった
調査を終えて、あなたのイメージしていた離島教育と違いはありましたか	8	17

有無を示す。(1)の調査後のイメージの変容について、違いがあったが8名、なかったが17名であった。あったと回答した学生の自由記述では「地域と密着した伝統行事や地域との交流を取り入れた授業づくりについて」や「生徒と教員との距離が近いことまたそのことと学力との関係について」、「学習環境とその整備について」、「離島の強み」、「生徒の実態」などが挙げられていた。また、オンラインコンテンツとなり体験活動ができなかったため「現地での体験活動で得られる学びではなかった」といった離島実習の学びに関するイメージの違いについての回答もあった。

4. 考察

4-1 離島実習における学生および受入校の意識

離島実習において学生、受入校ともに離島の子もたちと触れ合いながら離島における教育の現状を知るということを意識し実習を迎えていることが分かった。また、学生は離島教育の現状を知るとは将来教員になった際に必要であると感じており、地域と学校とのつながりや子どもたちの様子についてより学びを深めたいと考えていた。受入校では離島・へき地の困難さというよりもむしろ、島や地域、子どもとの触れ合いを通じて、離島の魅力を感じてもらい、教員への意識を高めてもらいたいと考えていることが伺えた。

受入校が学生に実習を通じて身に付けてほしい力は教育に対する使命感であった。また、小学校では離島・へき地の良さへの気付きや地域との関係性が、中学校では離島・へき地の学校の役割の把握が挙げられていた。一方、適切な児童・生徒理解や離島・へき地ならではの教材の開発はどちらも少なかった。実習は1週間程度と短期間であるため、児童・生徒理解や教材開発ではなく、まずは教員としての使命感を培い、離島・へき地の良さや学校の役割を理解してほしいと考えていることが推察された。また、小学校では複式または少人数学級等における授業力も身に付けてもらいたいと考えていた。

受入校はこれまでの離島・へき地実習について、学生の様子、児童・生徒の反応、地域の方や教員の反応のいずれも良かったと答えている。また、離島実習も継続して行いたいと考えていた。児童・生徒の反応はとても良いという回答から、子どもたちにとって有意義な時間であったことが示唆される。地域の方や教員の反応も良く、学校行事や地域の行事等といった学校教育全体に関わる体験的な教育実践活動を通じて離島やへき地の学校教育の現状や地域に果たす「学校」の役割を理解するという離島・へき地実習の目的が学生、受入校また地域で共有され、実施されていると考えられた。

4-2 オンライン交流に向けての実態

オンライン交流の内容として、学生の将来の夢や児童・生徒の将来の夢の交流、学生との交流といった回答が多く、キャリア教育の視点を踏まえ夢を膨らませたり、多様な考えに触れあったりする活動を重視していることが伺えた。また、オンライン交流を実施する場合、まずは1時間（または1単位時間）程度で、学期もしくは月に1回程度から始める

ことが受入校の負担なく実施できるのではないかと考えられた。

一方、対応が難しい理由として、オンライン交流における児童・生徒や学生への効果が期待できないこと、時間が取れないことが挙げられた。これまでの離島・へき地実習では、学生と離島・へき地の学校とをつないだオンライン交流の実績はなく、どのような活動を、どういう目的で行うかが不透明であり、教育効果をイメージすることができなかつたと考えられる。離島・へき地の学校とのオンライン交流を実現するためには、オンライン交流の教育効果の検証を進める必要がある。倉田・西田は、離島実習で得られない視点を得るためには離島勤務教員らとのディスカッションを教育活動に取り入れる必要があると述べている¹⁵⁾。児童・生徒とのオンライン交流が難しい場合であっても、離島勤務教員との意見交換やインタビュー等が実現できれば離島教育の資質に関する視点を得ることができるかもしれない。

4-3 オンラインコンテンツ導入の成果と課題

オンラインコンテンツは、離島・へき地について新たな発見を得ることができる教材となり得ることが分かった。また、離島・へき地についての学びの深まりや教育に携わりたいたいという気持ち、さらには教職の魅力や教職への想いについて肯定的な意見が多く、効果的であったと考えられた。オンラインコンテンツでは学生がWEBサイト等から離島の魅力を発見したり、県の施策や国立教育政策研究所の資料から離島・へき地の課題や教育の現状について調査したりする。また課題図書から離島・へき地における教育についてまとめている。これら内容について理解できたと答えた学生が多く、効果的であったと考えられる。自由記述においても「資料が多かったので様々な視点から学ぶことができた」「長崎県出身でありながら県内の離島については詳しく知らなかったので、オンラインコンテンツを通じて離島の魅力や離島教育について理解が深まった」「文献調査をたくさん行うことができたため、離島教育についてさらに詳しく知ることができた」といった意見があり、離島の現状や離島教育について多様な資料から多面的に捉えることができたことが推察される。また、実習予定校への手紙やビデオメッセージの作成を通して学校と交流する課題では、子どもたちとつながることの大切さに気付くことができていた。良かったことの自由記述にも「ビデオメッセージという新しい形で離島の子どもたちと交流できたのは良かった」「ビデオメッセージによって実際に子どもたちとの交流ができたこと」といった記述が見られ、オンラインコンテンツであっても離島・へき地の学校また子どもたちと実際につながる課題を取り入れる重要性が示唆される。また、ビデオメッセージを作成したグループでは動画編集・作成の力が付いたといった記述もあった。

しかし、実習予定校への手紙やビデオメッセージ等での交流については、少人数ではあるが子どもたちとつながることの大切さに気付けなかったという学生もいた。また、複式授業のビデオ資料による小規模、少人数学級における授業の進め方や、(3)の課題である教材づくり全般においても同様の傾向が見られた。これは「離島の魅力や課題、複式の授業については、オンラインコンテンツでも知ることができたが、実際の様子や雰囲気まではオンラインコンテンツでは知ることができなかった」と「課題で離島教育に関する論文を読むことで大変勉強になったが、もし可能であるならば実際に離島の小中学校で実践された授業の様子を見てみたいと思った」という意見に代表されるように、実際の離島

の子どもたちと触れ合うことや、授業や学校の雰囲気を見ることができず、理解を深化させるまでに至らなかったのではないかと考えられた。これはオンラインコンテンツ全体を通じての回答においても同様の傾向であり、「リアルではないと分からない部分が多く、情報として知っても学びが深まるわけでは無かった気がする」「実践的な部分での関り方がしたかった」「周りの友達の実習に行っているため、差ができた一年になったと感じた」「実習先の児童と交流もなく、指導案やメッセージを作成するのは普通の授業とあまり大差ないように感じた」が挙げられ、学生は体験的な活動を通じて得られる学びを重要視していること、また、将来教員になったときのことを考え少しでも子どもたちと触れ合う経験を求めていることが伺えた。「オンラインで自習をするだけでなく、オンラインで意見交換会（自分の調べたことのプレゼンや、離島に対するイメージの共有、離島へ足を運んだことがある人の体験談などを話す）を行えたら、新たな気付きや繋がりができるのではないかと感じた」とあるように、実際の離島の様子が参観できない場合でも、学生間または学生と離島勤務経験者との交流を取り入れることでより理解が深まる可能性も示唆される。また、離島実習は実習生の意識を大きく変容させる実習ではあるが¹⁴⁾、オンラインコンテンツでは多くの学生が離島教育に持つイメージに違いを感じておらず、意識の変容は見られなかった。この要因については今後さらに調査を進めていきたい。

4-4 オンライン交流

2020年度の離島・へき地実習においてA市立B小学校とオンライン交流を実施した。オンライン交流実施にあたり接続テストを2021年1月29日に行い、実際の活動を2021年2月4日に実施した。オンライン交流は長崎大学教育学部の4年生3名とB小学校5・6年生複式クラスで実施した。授業は大学生が計画し、大学での生活について写真や動画を使いクイズを交えながら紹介するとともに、離島の小学校での生活と大学生の学生生活とを比較するといった内容で実施し、小学生の10年後の姿を想像するというキャリア教育の視点に立った授業を展開した。

事後アンケートの自由記述では「オンライン交流を通して、遠隔授業のやり方を知ることができただけでなく、離島の学校の雰囲気や子どもたちの様子を知ることができた」「このような状況の中でもオンライン交流ができたことが嬉しかった。この経験はこれから活かしていけるのではないかと考えた」「離島実習担当の先生方、実習で訪問予定だった小学校の先生方のご理解、ご協力もあり、オンライン交流会を実施できた。B小学校の皆さんとオンライン交流会ができ、直接会えないながらもたくさんのことを学ばせていただいた。オンラインコンテンツの選択肢の一つとして、来年度も設定してほしい」といった回答が得られた。オンライン交流では今後求められる遠隔授業の方法について習得できたとともに、オンラインであっても離島の子どもたちと交流することの意義を感じることができていた。

一方、実施した小学校や担任教員、児童への事後アンケートは実施していないため、児童の変容や教育効果を明らかにすることはできなかった。今後、オンライン交流の実践を進めながら、学生、学校、また子どもたちへの教育効果を検証していきたい。

5. 引用文献

- 1) 長崎県：令和2年度長崎県学校別児童・生徒数等, https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kanko-kyoiku-bunka/gakkokoyoiku/edu_statistics/kihonkekka/460439.html, (最終アクセス日2021年10月11日)
- 2) 村田義幸, 橋本健夫, 北村右一, 平岡賢治, 水戸一幸, 浦田武：長崎県における複式教育実践上の課題, 教育実践総合センター紀要, 第6号, pp.15-25 (2007)
- 3) 森下浩史, 松園光代, 岩永祥子：長崎県における離島教育の現状と地域を活かした離島教育への提言, 教育実践センター紀要, 第9号, pp.159-173 (2010)
- 4) 原田純治, 村田義幸, 進野智子, 赤崎眞弓, 福田正弘, 平岡賢治, 小島道生：離島における教育の実情と課題, 南太平洋海域調査研究報告, 第45巻, pp.1-5 (2006)
- 5) 池松誠二：教育長はこう考える 池松誠二長崎県教育長に聞く教員採用で「離島枠」を検討, 内外教育, 6636号, pp.2-3 (2018)
- 6) 山元卓也, 奥山茂樹：教職大学院における離島実習の在り方に関する一考察, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 第29巻, pp.197-206 (2020)
- 7) 関山徹, 寺嶋浩介, 園屋高志, 藤木卓, 森田裕介：テレビ会議システムの教育利用とその普及－離島を含む僻地における心理的・社会的ニーズ－, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 特別号, 第3巻, pp.9-19 (2007)
- 8) 長崎県：第三期長崎県教育振興基本計画, <https://www.pref.nagasaki.jp/object/shikaku-shiken-bosyu/boshu/378486.html> (最終アクセス日2021年10月12日)
- 9) 寺嶋浩介, 関山徹, 藤木卓, 園屋高志, 森田裕介：へき地・離島地区における教師のICT活用に対する意識と実態, 日本教育工学会論文誌, 第32巻, 2号, pp.197-204 (2008)
- 10) 引地力男：出前授業を利用した離島中学校へのものづくり教育支援の検討, 工学教育, 第57巻, 1号, pp.93-98 (2008)
- 11) 岡朋史：離島を巡る現状と方向性：離島振興計画フォローアップ報告をもとに, しま, 第67巻, 1号, pp.14-23 (2021)
- 12) 長崎県：長崎県総合計画チェンジ&チャレンジ2025, https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kenseijoho/kennokeikaku-project/sougou_plan_change_and_challenge2025/index.html (最終アクセス日2021年10月12日)
- 13) 長崎県：長崎県公立学校教員採用選考試験, <https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kenseijoho/shokuinsaiyo/kyoshokuinsaiyo/siken/> (最終アクセス日2021年10月12日)
- 14) 屋宮栄作：離島へき地小規模校における観察実習の意義：奄美大島における学校環境観察実習とその教育効果, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 第25巻, pp.303-309 (2016)
- 15) 倉田伸, 西田治：長崎県での離島教育の資質を備えた教員養成のための視点の分析, 教育実践総合センター紀要, 第16号, pp.401-404 (2017)
- 16) 安達寿, 福田量, 藤吉りり子：離島実習が低学年の医学部学生に及ぼす影響, へき地・離島救急医療学会誌, 第17号, pp.25-27 (2017)
- 17) 田中克子, カルデナス暁東：学士課程における離島実習の学びに関する文献検討, 大阪医科大看護研究雑誌, 第11巻, pp.76-81 (2021)

6. 謝辞

本研究を遂行するにあたり多大なご協力をいただいた長崎大学教育学部蓄積型体験学習実施部会、部会長菅野弘之教授をはじめ離島・へき地実習担当西村大介准教授、駒津順子准教授、林幹大助教、また五島市教育委員会教育長村上富憲様、五島市崎山小学校元校長川崎康様、同校職員の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は「学部長裁量経費による令和2年度・研究企画推進委員会プロジェクト」の採択を受けて実施しました。

